

台湾人日本語学習者と「清濁」

中澤信幸*

The Taiwanese Learning Japanese and “*Seidaku*”

Nobuyuki NAKAZAWA

Abstract

The Taiwanese learning Japanese is very weak in hearing “*seidaku*”, which is the difference between voiced consonants and voiceless consonants. Because mandarin Chinese, which is their mother tongue, does not have a difference between voiced consonants and voiceless consonants, and has a difference between aspirated consonants and non-aspirated consonants, which Japanese does not have. I examined that, in hearing Japanese “*seidaku*”, Taiwanese is affected by a difference between aspirated consonants and non-aspirated consonants. As a result, when there is the line of “*Ta*” at the head of “*kango*”, which is Chinese loanwords, Taiwanese confused non-aspirated consonants with voiced consonants in hearing. But they did not confuse other words. And when there is the line of “*Ka*” and “*Ta*”, which are voiceless consonants, in the middle of words, Taiwanese often confused the line of “*Ga*” and “*Da*”, which are voiced consonants. Furthermore, they easily caught the difference between the line of “*Sa*” and “*Za*”, and it was slightly difficult for them to distinguish between the line of “*Pa*” and “*Ba*”.

Key words: The Taiwanese learning Japanese, voiced consonants and voiceless consonants, aspirated consonants and non-aspirated consonants

0 はじめに

筆者は2002年9月から2004年7月まで、台湾・台南県の長榮大学応用日本語学科（応用日語学系）で日本語習作の授業を担当した。ここで学習者が書いてくる文には、清濁を間違えている例が多く見られた。恐らく学習者が耳で聞いて覚えた語を、そのまま文字にして書いたからであろう。すなわち学習者が日本語を聞き取る段階で、清濁を間違えていたのである。

中国語には清濁の区別がなく、また日本語にはない有気・無気の区別があることが日本語の清濁を理解する上での妨げとなっていることは、すでに多くの先行研究で指摘されている通りである¹。しかし日本語の漢語の清濁と、もとの中国語の有気・無気との影響関係について述べたものはあまり見られない²。そこで筆者は、学習者が日本語の漢語の清濁を聞き取る際に、母語である中国語³の有気・無気がどのように影響しているかを調査した。本稿ではその結果を報告し、それを日本語教育にどう生かすことができるか考察する。

1 台湾人日本語学習者と清濁

台湾人日本語学習者にとって、清濁の正確な聞き取りは難関の一つである。間違っただけで聞き覚えたものを、そのまま文字として書くことも少なくない。

1.1 清濁の聞き違い

例えば台湾人学習者の書く文には、次のような清濁の間違いがよく見られる。

ちよつと → ちよつど（ちょうど）
ほんとう（本当） → ほんどう

しかし → しがし
だから → たがら

これらは日本語としては日常普通に話される語である。従って学習者もこれらの語をまず耳で聞き覚えた可能性がある。その場合に清濁を間違えて聞き覚え、そのまま文字にしてしまっているのである。

1.2 日本語の清濁と中国語の有気・無気

冒頭でも述べたように、日本語と中国語の子音には体系的な違いがある。

日本語 → 清音／濁音
中国語 → 無気音／有気音

日本語の清濁の区別は、音声学的には無気音と有気音の区別に起因する。一方中国語ではこの無気・有気の対立が存在せず、それとは別に無気・有気の区別が存在するのである⁴。

1.3 漢語の存在

日本語には中国語起源の漢語が数多く存在する。もちろん現代では発音はまったく異なるのであるが、文字が同じということがかえって混乱をきたすことが多い。台湾人日本語学習者が日本語の漢字を見ることによって、母語である中国語の有気・無気を関連づけて日本語の清濁を判断していることも想定できるのである。筆者はその点に着目し、もとの中国語の有気・無気が存在が、日本語の清濁を聞き取る上でどのように影響するのか調査することにした。

2 調査の方法と対象

2.1 調査の方法

今回の調査では中国語の有気・無気と日本語の清濁の対応を考慮した語彙表を作成し、それを発音・録音したものを学習者に聞かせ、清音（半濁音）なのか濁音なのかを答えさせるという方法をとった⁵。

2.2 語彙表について

中国語の頭子音には、次のような有気・無気の区別がある⁶。

t / d k / g
c / z p / b

一方、日本語の子音には、次のような清濁の区別がある。

タ行／ダ行 カ行／ガ行
サ行／ザ行 パ行／バ行

そこで、ここでは上記の有気・無気と清濁を対応させ、それらの音が語頭に出てくる漢語、また語中（「a, o, e」「i」「u」「N(ん)」「k(き、く、っ)」「t(ち、つ、っ)」の後）に出てくる漢語について語彙表を作成した。その語彙であるが、対象となる学習者が知識として清濁を知っているのでは調査をする意味がない。そこで語彙の選定に当たっては、学習者が知識として持っていない、なるべく難しい語を選ぶようにした（表1）⁷。また参考として和語についても選定した（表2）。語数は130（漢語96、和語34）である。

この語彙表をもとに清音（半濁音）か濁音かを選ばせる問題用紙（表3、4）を作成し、録音したものを学習者に聞かせて選択させるという方法をとった。

2.3 調査の対象

調査の対象であるが、上級の学習者では多くの日本語の（清濁を含む）語彙を知っているため、対象とはなり得ない。とはいえ平仮名が読めない、清濁の違いがわからないといった、まったくの初級学習者でも対象にはなり得ない。そこでここでは日本語を学習して1年程度の学習者を対象とした。具体的には長榮大学の応用日本語学科の学生（学習時間392時間程度）79名と、第二外国語選択者（学習時間56時間程度）128名の、合計207名を対象とした⁸。調査の時期は2003年6月6～13日である。

表 1 漢語

	語頭	a, o, e	i	u	N	k	t
d → タ行	单身	打倒	帶刀	上達	簡單	適當	鉄塔
d → ダ行	打撃	過大	代打	殴打	先導	国道	鉄道
t → タ行	徒勞	多投	追突	旧態	前提	激痛	実態
t → ダ行	題目	課題	会堂	球団	文壇	国土	雑談
g → カ行	個性	故国	性格	更改	変更	国歌	鉄鋼
g → ガ行	剛健	華蓋	大概	当該	天国		一概
k → カ行	誇張	旅客	開口	上空	貧困	刻苦	発刊
k → ガ行							
z → サ行	組閣	佳作	規則	不足	男子	力作	発足
z → ザ行	在学	家族	滞在	数字	心臓	独自	一族
c → サ行	草案	野菜	奇策	秀才	天才	色彩	八冊
c → ザ行	次回	保存	生存	無残	電磁	木材	一次
b → バ行					連邦	六敗	八百
b → バ行	暴動	予備	敗北	十倍	原板	伯備	八倍
p → バ行					返品	六票	一拍
p → バ行	盤石	打撲	解剖	従僕	円盤	石盤	別便

表 2 和語

	語頭	a, o, e	i	u	N	k	t
カ行	けもの	開ける	怒り	向く		まっか	
ガ行	ごみ	上げる	濁る	すぐ	考える		
サ行	去る	載せる	急ぐ	うそ			
ザ行	ざらざら	わざ	いずこ		うんざり		
タ行	たび	ほたる	いと	歌う			わかった
ダ行	だるい	脅す	井戸	うで	とんだ		
パ行	ばらばら						
バ行	ばれる	おば	威張る	うぶ	とんび		

表 3 問題例 (漢語、96 問)

1	雑談	a	ざつたん	b	ざつだん
2	原板	a	げんぱん	b	げんぼん
3	奇策	a	きさく	b	きざく
4	一拍	a	いっぱく	b	いっばく
5	華蓋	a	かかい	b	かがい

表 4 問題例 (和語、34 問)

97	a	さる	b	ざる
98	a	たび	b	だび
99	a	さらさら	b	ざらざら
100	a	わかった	b	わかっだ
101	a	おば	b	おぼ

3 調査結果の分析

調査の結果、以下のような正答率が得られた (表 5、6)。

表5 漢語 正答率 (%) (下線は80%以上、斜字体は50%未満)

	語頭	a, o, e	i	u	N	k	t
d→タ行	54.11	<i>34.78</i>	<i>38.65</i>	<i>38.65</i>	<i>27.54</i>	<i>42.51</i>	<i>24.64</i>
d→ダ行	<u>85.02</u>	75.36	73.43	<u>81.64</u>	76.33	76.33	73.43
t→タ行	<u>82.13</u>	<i>42.03</i>	<i>31.4</i>	<i>36.71</i>	<i>34.3</i>	57.97	<i>27.05</i>
t→ダ行	<u>83.09</u>	69.57	73.91	79.71	77.29	73.91	76.33
g→カ行	<u>86.96</u>	<i>23.67</i>	<i>30.92</i>	<i>35.75</i>	<i>30.43</i>	<i>36.71</i>	<i>38.16</i>
g→ガ行	79.23	<u>93.24</u>	<u>81.64</u>	73.43	79.23		<u>81.16</u>
k→カ行	<u>84.54</u>	<i>29.95</i>	<i>33.33</i>	<i>37.2</i>	<i>31.4</i>	77.29	<i>19.32</i>
k→ガ行							
z→サ行	<u>92.75</u>	<u>91.79</u>	<u>87.44</u>	<u>92.27</u>	<u>88.41</u>	<u>86.96</u>	<u>89.37</u>
z→ザ行	<u>92.75</u>	<u>81.64</u>	<u>92.75</u>	<u>90.82</u>	<u>93.23</u>	<u>90.34</u>	<u>90.82</u>
c→サ行	<u>91.3</u>	<u>85.99</u>	<u>91.3</u>	<u>85.51</u>	<u>83.57</u>	<u>84.06</u>	<u>80.68</u>
c→ザ行	<u>91.79</u>	<u>89.86</u>	<u>93.24</u>	<u>91.3</u>	<u>90.34</u>	<u>91.3</u>	<u>90.34</u>
b→パ行					66.18	<i>46.86</i>	54.59
b→バ行	57	75.85	<i>48.79</i>	57.49	55.56	71.5	56.52
p→パ行					<i>34.3</i>	59.42	<i>47.34</i>
p→バ行	60.87	51.21	50.24	<i>47.83</i>	58.45	57.49	70.05

表6 和語 正答率 (%) (下線は80%以上、斜字体は50%未満)

	語頭	a, o, e	i	u	N	k	t
カ行	<u>83.09</u>	<i>20.77</i>	<i>21.74</i>	<i>46.38</i>		<i>25.6</i>	
ガ行	<u>88.89</u>	<u>83.09</u>	<u>87.92</u>	<u>87.92</u>	77.29		
サ行	<u>91.3</u>	<u>91.79</u>	<u>86.47</u>	<u>88.41</u>			
ザ行	<u>92.75</u>	<u>95.17</u>	<u>86.47</u>		<u>93.24</u>		
タ行	<u>88.41</u>	<i>17.87</i>	<i>22.71</i>	<i>30.92</i>			<i>22.71</i>
ダ行	<u>88.41</u>	76.81	77.78	74.88	77.29		
パ行	65.7						
バ行	65.22	63.77	63.77	58.45	74.88		

3.1 語頭の場合

3.1.1 漢語

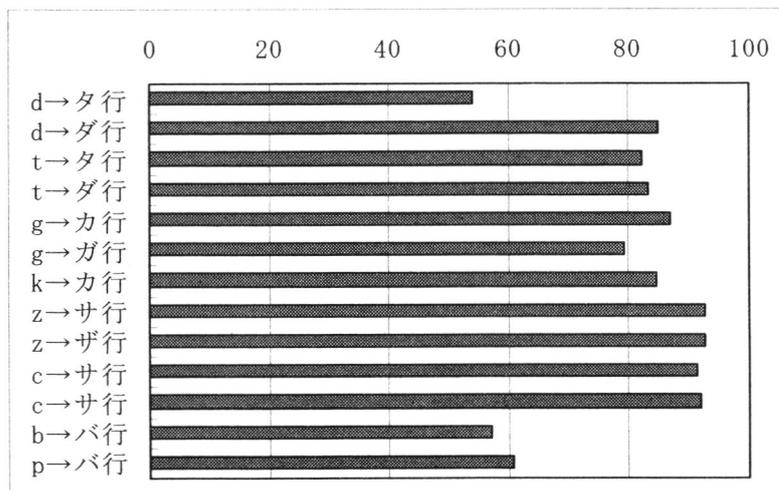


図1 漢語 語頭 正答率 (%)

図1を見ればわかるように、全体的に高い正答率である。その中で「d→タ行」(単身)だけが少し低い結

果 (54.11%) となっている。つまり「たんしん」を「だんしん」と間違えた学習者が多かったということだが、これは「無気音はすなわち濁音」と解釈されてしまっていることを物語る。「タ行音は語頭では有気音」というのが台湾人中国語母語話者の観察であり⁹、「たんしん」の場合も学習者には有気音に聞こえていた可能性が高い。しかしもとの漢字の「単」が無気音であるために、学習者の中には混乱をきたして「濁音」としてしまった人もいて、それが 54.11% という数字に表れたのであろう。

それに対して「g→カ行」(個性) の場合は、「こせい」という発音の有気性がより強かったために¹⁰、もとの漢字の有気・無気に左右されることなく清音と判断され、それが高い正答率 (86.96%) になって表れたと考えられる。

つまり日本語のタ行はカ行より有気性が弱いことから、その分清濁の判断においてもとの中国語の有気・無気の影響を受けやすかったといえるのである。

なおバ行については、もとの中国語が無気の場合 (暴動) も有気の場合 (盤石) も 60% 前後の正答率に留まっている。語頭がバ行になる漢語がないために、今回はパ行とバ行との具体的な比較ができなかったが、この二つの聞き取りは比較的困難なようである。

3.1.2 和語

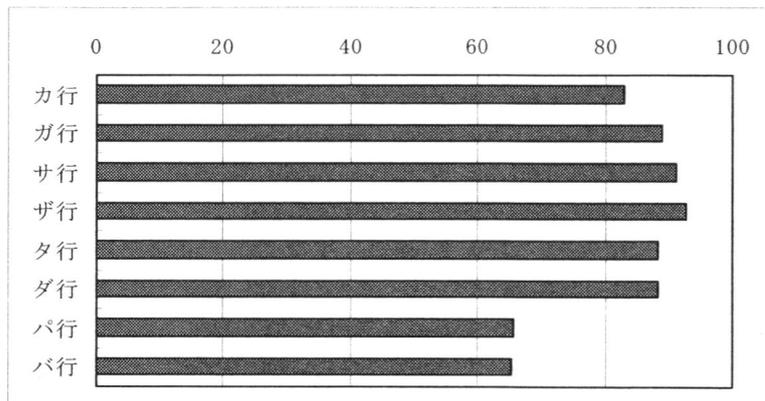


図2 和語 語頭 正答率 (%)

和語の場合も図2を見ればわかるように、全体的に高い正答率といえる。その中でパ行 (ぱらぱら)、バ行 (ばれる) だけは 65% と少し低い正答率である。やはり台湾人学習者にはパ行とバ行の区別は比較的難しいということがわかる。

3.2 語中の場合

3.2.1 漢語

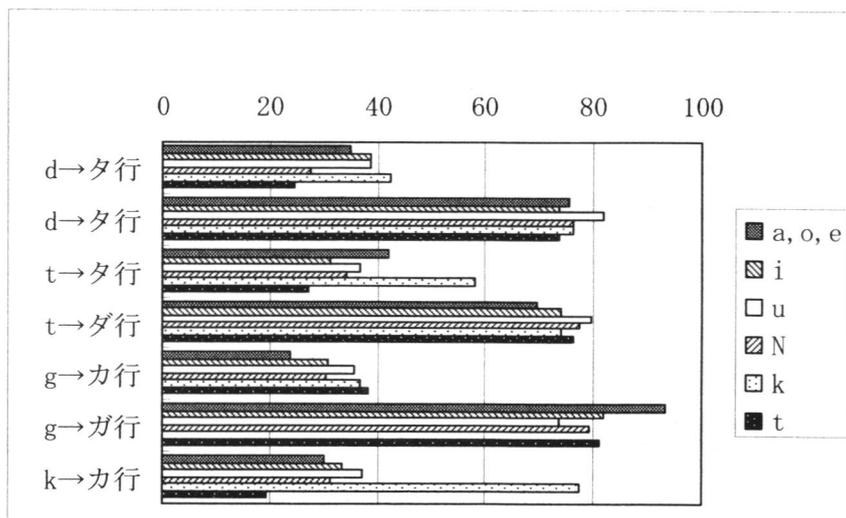


図3 漢語 語中 (タダカガ行) 正答率 (%)

まずタ・ダ行とカ・ガ行であるが、図3を見ればわかるように、タ行、カ行の正答率がダ行、ガ行に比べて低い。つまり清音を濁音と聞き取ってしまう場合が多くて、この場合もとの中国語の有気・無気はあまり関係ないと言ってよい。語中のタ行、カ行が濁音として聞き取られやすいというのが、一般的な傾向と見て差し支えないであろう。日本語では語中にタ行、カ行が来る場合、無気音で現れる¹¹。そのため「無気音はすなわち濁音」という図式が適用され、濁音と判断されてしまったものと考えられる。

なお「k→カ行」のうち、「k」の後(刻苦)だけは正答率が高いが、これは実際には母音無声化で現れているもので、そのために容易に清音と判断されたものと考えられる。

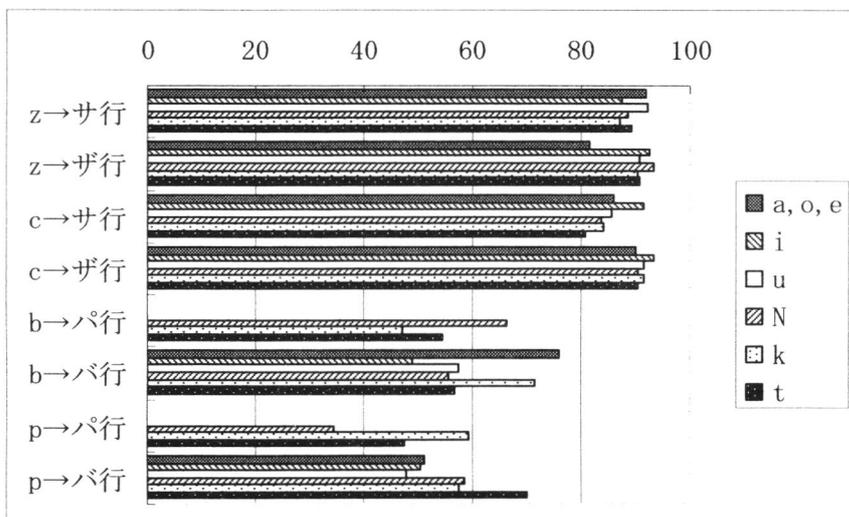


図4 漢語 語中 (サザパバ行) 正答率 (%)

次にサ・ザ行とパ・バ行であるが、図4を見ればわかるように、サ・ザ行は軒並み高い正答率である。こちらはもとの中国語の有気・無気に関わらず、清濁の聞き取りは比較的容易であると判断できる。

一方パ・バ行については語頭と同じように低い正答率に留まっている。ただ「b→バ行」のうち a,o,e の後(予備)は 75.85%と比較的高い正答率を見せる。3.1.1 で述べたような「無気音はすなわち濁音」という解釈が、ここでも成り立っているように見える。しかし「p→パ行」のうち「t」の後(別便)も 70%と比較的高い正答率を見せており、これは「無気音はすなわち濁音」、また「有気音はすなわち清音」という図式には当てはまらない。一方「p→パ行」の「N」の後(返品)は 34%とかなり低く、やはりこの図式には当てはまらない。先にも述べたように、このパ・バ行の区別は台湾人学習者にとって困難なものであることは確かであるが、それを中国語の有気・無気との関連で捉えるには無理がありそうである。

3.2.2 和語

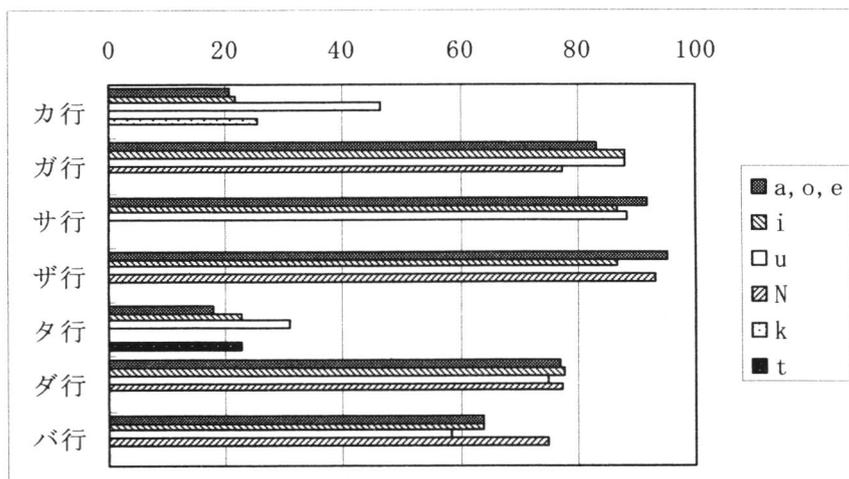


図5 和語 語中 正答率 (%)

和語の場合図5を見ればわかるように、カ行・タ行の正答率が低い。3.2.1で述べた「語中のタ行、カ行が濁音として聞き取られやすい」という傾向が、ここでも認められるのである。やはり実際の発音としては無気音で現れるために、「無気音はすなわち濁音」という図式が適用されたのであろう。

一方サ・ザ行音については漢語の時と同じように高い正答率を見せ、やはり台湾人学習者にとってサ・ザ行の清濁の聞き取りは比較的容易であると判断できる。

それに比べるとバ行の方は60%前後とやや低い正答率に留まり、やはりこの清濁の区別は比較的困難なものであると考えられる。

3.3 まとめ

以上の考察の結果をまとめると、次のようになる。

- ① 漢語の語頭の場合、タ行音でもとの中国語の有気・無気との関係から、「無気音はすなわち濁音」と解釈したことによる間違いと見られる例があった。ただし、有気性がより強く現れるカ行音ではこの傾向は見られなかった。
- ② 語中のカ行、タ行は高い確率で濁音に聞き取られる傾向がある。これは漢語、和語ともに見られる傾向であり、実際の発音としては無気音で現れるために「無気音はすなわち濁音」と解釈されてしまっているものと考えられる。漢語の場合もとの中国語の有気・無気とは関係がないようである。
- ③ サ・ザ行についてはいずれの場合にも高い正答率を見せ、この二つの区別が台湾人学習者には比較的容易なものであることがわかった。一方パ・バ行は低い正答率に留まり、この二つの区別が台湾人学習者には比較的困難なものであることがわかった。

4 今後の展望 —教育にどう生かすか—

本稿は中国語の有気音・無気音が、日本語の清濁の聞き取りに与える影響について考察しようとしたものである。しかし先に1.3で挙げたような想定は、漢語の語頭のタ行音を除けば明らかにすることはできなかった。その反面、「無気音はすなわち濁音」と解釈されるという傾向は見取ることができた。また中国語の有気・無気に関わらず、ある一定の傾向で清濁の間違ひが見られることも明らかになった。

清濁の指導に関しては語彙レベルで行われることが多いが、その間違ひに一定の傾向が見られるのであれば、それを生かさず手はない。語彙レベルで指導する時にも、清濁の間違ひやすい状況を知っていれば、その都度注意して指導することができる。

また今回の有気・無気に限らず、中国語音と日本漢字音との対照を教育に生かそうという試みはまだまだ少ないと言わざるを得ない。今後はこの両者の対照をさらに進めるとともに、学習者の誤用についてもさらに分析を続ける必要があるであろう。

注

- 1 蔡茂豊(1976)^[1]、吉田則夫(1990)^[5]など参照。
- 2 謝逸朗(2000b)^[3]は日本漢字音と中国語音との対応関係について説明し、日本語教育に生かそうとしたものである。このような現代の日本漢字音と中国語音との対応について正面から取り上げたものは、まだまだ少ないと言わざるを得ない。
- 3 台湾の日本語学習者には台湾語の影響があることも考慮に入れる必要があるが、今回は中国語(台湾の「国語」)を中心に考えることにする。
- 4 日本語の清濁は厳密には音声学の無声・有声の区別とは異なる。例えば現代語のハ行音とバ行音との関係は、無声・有声の関係ではない。(むしろパ行音とバ行音が無声・有声の関係となっている。これはハ行子音の歴史的変化に起因する。) また無声・有声の対立が存在しないマ行音やラ行音なども清音と言う場合がある。

ただ中国語母語話者にとって問題になるのはこの無声・有声の区別であるので、本稿では清濁の区別は無声・有声の区別に限定して考察する。従ってハ・バ・パ行の場合は、バ行音とパ行音(半濁音)の区別を対象とする。

日本語の「清音」「濁音」の語は、中国の音韻学から取り入れられたものである。すなわち中国語中古音では有気・無気の対立の他に有声・無声の対立も存在し、それぞれ「清音(無声無気音)」「次清音(無声有気音)」「濁音(有声音)」と呼ばれていた。なお清濁に関しては『世界大百科事典』(平凡社)の「清音」「濁音」の項(亀井孝執筆)を参照。

- 5 静岡県焼津市出身の女性が、語彙リストを読み上げるという形で発音したものを録音した。この女性はアナウンスの仕事の経験もあり、録音の時にもなるべく日本語として自然な発音をしてもらった。録音時間は約 19 分 (130 語) である。
- 6 本稿では中国語の音声表記に、日本の中国語教育で一般に用いられるピンイン (拼音) を使用した。ピンインでは有気音を「t・k・c・p」で表し、無気音を「d・g・z・b」で表す。
- 7 表 1 で「i」の後に出てくるものとして「性格」「生存」を挙げているが、これらは実際の日本語では「i」ではなく「e」で現れるものである。しかし本稿では、中国語の発音「xing (性)」「sheng (生)」と日本語の仮名「せい」をもとに学習者がどんな判断をするかを重視し、あえてこれらを「i」の後に出てくるものとした。「u」の後に出てくるものとした「上達」「殴打」等 (実際の日本語では「o」で現れる) も、同様の判断による。

また「k」「t」の後に出てくるものとした中には、母音で現れているものと促音で現れているものがあるが、これも漢字の入声韻尾を学習者がどう判断するのかということを重視し、あえて同列に扱った。(現代中国語では入声韻尾は消滅しているが、台湾語には存在する。)

- 8 調査時の状況はクラスによって多少異なり、少ないクラスで 14 名、多いクラスで 62 名いた。いずれのクラスでも教壇にカセットデッキを置き、それにマイクを当てて録音テープを再生した。再生時間自体は約 19 分だが、学生が記入するために多少余裕を持たせたので、トータルで 30 分ぐらい要した。

また今回はより多くのデータを得るために、応用日本語学科の学生と第二外国語選択者という学習時間の異なる学生を対象としている。正答率はそれぞれ次の通りである。

学生全体	66.76%
応用日本語学科	73.02%
第二外国語選択者	62.97%

- 9 謝逸朗(2000a)^[2]では、台湾人が日本語のカ・タ・パ三行を観察した結果として、次のように述べる。
- ① カ・タ・パ三行のうち、タ行音は語頭では有気音、語中・語尾では無気音であるが、カ行音・パ行音は語頭でも、語中・語尾でも常に有気音である。
 - ② タ行音の「チ」「ツ」二音は、常に無気音である。
 - ③ 一拍助詞や促音・撥音の後に来るカ・タ・パ三行音は、無気音である。
- 10 辻星児(2003)^[4]によれば、日本語 (および中国語) の語頭の気音量を少ない順に挙げていくと、次のようになるという。(数値は概数。さまざまな要因で数値は変化する。)
- 中国語の無気音[p-],[t-]と日本語[p-] (パの子音) は、ほぼ同じで 10ms 前後、次に中国語の無気音[k-]と日本語[t-] (タの子音) がほぼ同じで 20ms 程度、次に、日本語の[k-] (カの子音) が 30~40ms、次いで中国語の有気音[p^h],[t^h]がともに 60ms 前後、そして[k^h]が 80ms 以上といった順となる。
- この結果や注 9 の謝(2000a)の記述によれば、日本語のカ行はタ行より有気性が強いといえるのである。
- 11 注 9 で挙げた謝(2000a)^[2]の観察では「カ行音…常に有気音である」とあるが、一方でここで注意しなければならないことは、日本語の有気は中国語のそれより気音の量が少ない。したがって、中国語の有気・無気音の対立ほどにその差は大きくない。
- とも述べている。ここでは語中のカ行が無気音で現れたと考えて差し支えないであろう。

引用文献 (五十音順)

- [1] 蔡茂豊(1976) 中国人に対する日本語の音声教育 (『日本語教育』30、日本語教育学会)
- [2] 謝逸朗(2000a) カ・タ・パ三行の発音 一有気と無気一 (『中国人日本語学習者における日本語学習上の諸問題 一台湾人日本語学習者を中心として一』櫻花村出版社)
- [3] 謝逸朗(2000b) 日本漢字音と中国漢字音 (『中国人日本語学習者における日本語学習上の諸問題 一台湾人日本語学習者を中心として一』櫻花村出版社)
- [4] 辻星児(2003) サウンドスペクトログラフによる日本語と中国語の音声対照 一対照言語学の一方法一 (『日本言語文芸研究』4、台湾日本語言文芸研究学会)
- [5] 吉田則夫(1990) 清音と濁音の区別 一日本人・中国人の場合一 (『講座日本語と日本語教育第3巻 日本語の音声・音韻 (下)』明治書院)